

念仏というのは
人と人を水平に配置する原理、運動

玉光順正

光
円
寺
報

2010年 6月

〒679-2323 兵庫県神崎郡
市川町甘地 384

後藤明照、由美子(惟蓮)

T&F 0790-26-0162

メール kouenji_dayo

@nifty.com

<http://kouenji-hou.com/>

通信費年間1000円



デモクラティック・フィールド のらねこ

仏教徒宣言(その七十八)

六月も半ばになり梅雨に入ったようです。六月のイメージは「田植え」に「雨」・「カエル」・「かたつむり」・「あじさい」…。と、雨に関係する事柄が浮かんできます。でも、梅雨のない北海道の人たちにとっては、全く違うイメージなんでしょうね。又、世界的な視線で見てもやっぱり「梅雨」の時期の六月でない所は、違ったものなのでしょう。自分の持っている様々なイメージって狭くて小さくて限りのあるものなのでしょう。仏教はそんな私たちが持って、手放そうとしない自分自身の在り方・相(すがた)やイメージの囚われや執着を鏡のように、言葉でもって言い当て映しだします。

例えば、お経の中に「雨」という言葉があり、「雨る(ふる)」という読み方で出てきます。それは、「天より妙華を雨らして」とか「無量の妙華を雨らす」とか「甘露の法を雨らして、衆生を潤すがゆゑに」とこれらは『仏説無量寿経』にあります。又、「虚空のなかにありてあまねく天華を雨らして」と『仏説観無量寿経』にもあり、「昼夜六時に天の曼陀羅華を雨らす」と『仏説阿弥陀経』の中にも有ります。私たちが三部経と親しんでいる經典に、このように「雨」を「ふる」と読むことで雨のように、天から何とも言えない美しい花びらや、甘くて非常に美味しい露のような喩えで持って法を雨らす。と阿弥陀の浄土の素晴らしさを表現しています。

「雨」を「ふる」と読むことで雨の持っている自然の豊かさを表し、同時にその雨が水につながり、それが「いのち」につながって行く。いのちは水から生まれた。そのいのちを支えている水が雨として天から「ふる」。そして、大地に吸い込まれ湧き水として地表に現れ、川となり海に流れ込むとい

う循環を繰り返している水と、その水に支えられながら生き続けるいのち。そのいのちの、一つの形が「私」として今、生きています。

六月・梅雨・雨・水・・・が私を生きるいのちにつながる。

一つの言葉が、このように広がりを持ったものとしてイメージが膨らみ、固定されてしまった私を破ってくる。それが、池に投げ込まれた石の波紋のようにどんどん拡がり、私の世界が壊され続ける。そんな働きとして阿弥陀の浄土が南無阿弥陀仏となつて私に届けられる。金子大栄さんが「南無阿弥陀仏は自我崩壊の音である」と言われたが、まさに自分の囚われの世界が破られ壊されて行くのです。

先月の同朋会で、参加された方が、浄土が無量無辺、はてもなく限りもないということ、自分がわかつたと思つたら破られ、又わかつたと思つたら破られ、自分の世界がどんどん拡がっていくことなんだと腑に落ちた。ということをお話しました。「經典」の中の言葉はむずかしいようですが、それぞれが自分の身を通して言葉として、その意味を発見していくのだと思います。

憲法改正のための国民投票法案が施行されました。戦後六十五年の平和を守ってきた世界の宝と言われる平和憲法を、私たちはしっかり受け取っているでしょうか？その意味がいかに私たちの日常に影響しているか発見しているでしょうか？憲法十二条には「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によつてこれを保持しなければならぬ」とうたわれています。自灯明法灯明（自分で考えよ、そ

めに学びなさい）という釈尊の遺言がひびく時です。

仏事ミニメモ 通夜

通夜とは、遺族をはじめ縁のある者が夜を通して、葬儀までの間、亡き人を偲び、静かにご遺体を見守るといふのが本旨です。ですから、お勤めの間だけを通夜というのではありません。身近な人の死という現実を謙虚に受け止め、日ごろ忘れがちな「生死」の問題について、深く考える一夜にしたいと思っています。

故人は人生の最後に、身をもつて教えてくださっています。それは、「人はみな死ぬ」という事実です。つまり、この私も、必ず死を迎えなければならぬ生を送っているということです。

そしてそれは、「死と隣り合わせで生きているあなたは、これからのように生きるのですか」という、亡き人からの問いかけでもあります。

故人とは生前中、ケンカもし共に笑いもし、いろいろなことがあったことと思います。さまざまな思い出がよみがえってくることでしよう。しかし、それらすべてが、何かを教えていることではなかつたでしょうか。夜を通して、お互いに話し合えれば、通夜の本旨にかなうことでありましょう。さて、通夜勤行（通夜のお勤め）の時間が近づきました。お勤めは、仏さまの教えに出会う大切な縁になるものです。お勤めや住職のお話（法話）をとおして、生きていくことの尊さを仏さまの教えにたずねていただきたいと思ひます。

それでは、喪主、近親者、遠縁の順に席につきましょう。弔問者の座る順番は、事情のある場合を除いて、前から順次座つていただきます。合掌は、住職に合わせて行つてください。このとき、数珠を忘れないようにします。

